詩編 75 編の黙想（2022 年 0 8 月 03 日東福岡教会祈祷会奨励　松見俊）

神の公平な審きを待ち望む

頭書の「滅ぼさないでください」の調については 57 編、58 編、59 編参照。これも聖歌隊長アサフの作詞である。琴の伴奏による讃美歌である。バプテストにもベンジャミン・キーチ（17 世紀）や現在の新生讃美歌にも曲と詞がある B.B.マッキニー(1886 -1952, 262, 284, 388, 426, 479, 491, 621,650)など讃美歌の才能溢れる人たちがいる。

この讃美歌は「感謝」から始まる。そして、神の「公平な審判」に期待し、印象的な「角」（力の象徴？）への言及が登場する。高慢な人の「角」が折られ、神に従う人の「角」が高く上げられますように！（11 節）しかし、現在狩猟文化ではない日本社会で「角」は私たちにどのくらい現実味があるのだろうか？現代に置き換えたらどのようなイメージになるのだろうか。

１．神よ、あなたに感謝をささげます（2 節 a）

２節では「わたしたちは感謝を捧げます」が修辞学的に繰り返されて印象深い。「わたしたちは感謝します。あなたに！　神に、わたしたちは感謝します。」これは単なる修辞学的繰り返しを超えて、信仰者に溢れ出る気持ちなのだろう。わたしたちは神に多くの願い事をするが、叶えられたことにどれだけ感謝しているだろうか？毎日新たに「いのちの息吹」を与えられ、生かされていることに感謝しよう。たとえ、生きることが苦しくとも、神に感謝をしよう。神への感謝と賛美こそ人間にふさわしい勤めである。感謝は与えられた「もの」や「こと」への応答であるが、「賛美」は与えてくださるお方自身へ向かう。神は一番大切なお方イエス様をお与えになられ、私たちの祈りや願いをすでに聴いて下さったのである。神よ、わたしたちはあなたに感謝をささげます。

２．御名はわたしたちの近くにいまし(2 節)

神は関係の神としてご自身のみ名を啓示されている。「あなたの『御名』は「近い」のだから」も素敵な表現というか、素晴らしい真実である。関わりの神、み名を知らせる神、み名において現臨する神は私たちのすぐ傍らにいます。（人々は）あなたの驚くべき業、イスラエルを救い、贖うみ業を「宣言する」（書き留める、数える、語るの強調形)。「人々は」ではなく、「わたしたちは」でも良いし、「奇跡そのもの」が語ると翻訳することも可能である。以下（３～6 節）は神あるいは奇跡を通して「神が」語ると理解するのが良いであろう。あるいは途中からは神の語りを受けて、６～7 節は聖歌隊が歌い、告白しているとも理解できる。神の創造の秩序（据えられた基）は邪悪な人々によって覆されることはない。

３．公平な審き（3 節、８節）

「わたしは適切な時に、公平な審きを行う」(「ミシュパート」) この審判はいつでも、何処にでも、というのではなく、神の時に、時にかなうときになされる。ここに人間の判断と神のときの違いがあるのだろう。しかし、神は 8 節によると「必ず裁きを行い」と言う。原語は「神は審判者である」という表現である。神の裁きは公平であって、驕る者、神に逆らう者を挫き、低くされ、低くされた者を引き上げ、高くされるのである。この公平な審判を期待し、待つことが信仰者の姿である。

４．角を高く上げる？（５，６節）

「角突き合わせる」という表現がある。鹿や牛などが角で闘うイメージもある。この詩では５節では、驕り高ぶる者に向かって、「おごり高ぶって行動するな」「角（カーレン）を高く上げるな」と警告し、６節でも「角」が登場し、「あなたの角を高く上げるな」、「堅いうなじでしゃべるな」と言っている。「角」は力の象徴であろうか、高慢な者たちが角を高く上げるというイメージはあるが、神が「義人の角」を高める（11 節）という表現が意外である。現代では「鼻高々」「胸をそっくり返して」とでも表現するのか？

５．審判者である神（７～８節）

７節では、「東からでも、西からでも、南からでも「高挙」（到来すること）はない」と宣言されている。なぜ「北」がないのか良く分からない。あるいは「砂漠」が南、「山々」が北を意味しているのかも知れない。とにかく、人が人を裁くのではなく、神が裁かれるからである。「神が審判者である」という表現は力強い。

６．神の審判の結果（11 節）

９節の「杯」「泡立つ酒」は神の怒りの審判の隠喩である。主イエスはマルコ 14:36 で「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。」と祈られた。ヨハネの黙示録 14:10 も参照。11 節では「わたしは逆らう者の角をことごとく折り、従う角を高く上げる」と言って、ここでもまた「角」（ナルネイ）が登場する。「邪悪な者の角」と「義なる者」の角」が対比されて、邪悪な者の角は切られあるいは折られ、義なる者の角は高められるであろうと言う。この逆転が神の審判の結果である。私たちが心を騒がせ、冷静でいられないのは、自分で自分や他者の審判者となっているときなのであろう。パウロが「わたしにとっては、あなたがたに裁かれようと、少しも問題ではありません。わたしは、自分で自分を裁くことすらしません。自分に何もやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです。ですから、主が来られるときまでは、先走って何も裁いてはいけません。」と言っていることを肝に銘じておこう。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」（マタイ 23;12）。